

オペラ座からの招待状

シナリオ制作: 浜中なちか

月とゼンマイ <http://www.furbet.com/>

概要

参加者3人のオフラインセッションで探索者作成も含めて8時間程度。
とある劇団のプライベート公演に招待された探索者が擬似的なハスターの召喚を目撃するというクローズドサークル型のシナリオです。
探索メイン、戦闘はオプション程度。
屋敷のマップも広く行動の幅も広いですが、結局のところ、いかにして荷物に忍び込んだ黄の印を欲しがっている相手に押しつけて公演を迎えられるか、という話です。

NPC

みたない
三田内ソラ

30代 / 男性 / 劇作家

本名、三田祐一。大在学中に劇団アトモスを立ち上げ、在学中に『リング・グッドバイ』『月下風葬』などの代表作となる舞台を成功させる。
彼の演劇は過激でかつ醜悪な描写が目立つ、お世辞にも見ていて心地よい舞台ではない。だが、そういった演出などのメッセージ性、現実への強烈な批判などがある種の芸術と捉えられ、一部から熱烈に支持されている。三田内ソラの舞台こそ真のアートである、というのがファンの主張である。現在は劇団アトモスの座長であり、その公演などを取り仕切る株式会社インテグラルの代表取締役。一風変わった人物で言動やファッションなどが奇抜なことでも有名。
今回のプライベート公演期間中は、真冬にもかかわらずアロハシャツを着用。その上に防寒具を着込んで探索者を出迎える。

たにぎきとおる
谷崎 徹

40代 / 男性 / 演劇評論家

STR 10 CON 10 SIZ 16 INT 13 POW 10
DEX 10 APP 10 EDU 15 SAN 50 耐久 13
〈言いくるめ〉45 〈聞き耳〉65 〈芸術：評論〉60 〈写真術〉30
〈図書館〉45 〈目星〉65 〈歴史〉40 他必要と思われる技能
三田内ソラおよび劇団アトモスに関しては否定的。
『月下風葬』初演を見たことがあり、以来三田内を毛嫌いしている。招待状はツテを使ってもぎ取った。酷評記事を出す気満々。
個室は南客室1を希望。

ことうきりこ
古藤 桐子

20代 / 女性 / 演劇雑誌の編集者

STR 8 CON 9 SIZ 11 INT 16 POW 15
DEX 9 APP 11 EDU 15 SAN 75 耐久 10

〈聞き耳〉40 〈経理〉40 〈写真術〉50 〈追跡〉40

〈図書館〉45 〈目星〉45 他必要と思われる技能

劇団アトモスの看板女優、日比生アイの追っかけでもある。三田内ソラとも親しい。今回の公演に日比生が参加していないことを知って不満たらたら。

個室は南客室2を希望。

みしまゆう 三島夕

30代／性別不問

野暮ったい自称役者。

彼にアトラスや三田内との関係性を聞くと、『リング・グッドバイ』公演直前に失踪した男優の友人であり、それ以降、三田内の行動を追い続けてきた、という身の上話が聞ける。このプライベート公演でも何か起こるかもしれないと考え、それを見届けるために顔見知りだった日比生アイの伝手を使って招待状を手に入れた。

正体はハスターの創造に興味を持ったニャルラトホテプでもいいし、ただの厨二病患者でもいいし、そもそも登場させなくてもいい。※テストプレイ時は元ネタありの二次創作的キャラでした

個室は探索者たちから最も遠い場所か、東客室2を希望する。

すめらぎすばる 住良木 昂

40代／男性／無職

似来島唯一の住民であり、皇館すめらぎの所有者の資産家。

演劇に大いに興味を持っており、アトラスの熱心なファン。劇団立ち上げの時など出資を惜しまず、三田内とはたびたび似来島へ呼ぶくらい親しい間柄だった。

一年ほど前から三田内の行動に違和感を持っており、日に日に狂気にかられていく彼に恐怖も感じていた。半年ほど前に三田内の実験の一環で生ける屍にされ、地下室に幽閉されている。

●うごめく死体、かつて住良木昂であったもの

STR 9 COM 15 SIZ 12 DEX 12

APP 1 INT 18 POW 1 EDU 7

耐久力 14 DB ±0

〈噛みつく〉30% 1D3

〈組み付き〉25%

〈火かき棒〉25% 1D8

貫通する武器で与えられたダメージはすべて1ポイント、その他の武器ならば半分の値になる。詳しくはルルブのゾンビ参照。

うごめく死体を見た正気度喪失は 1/1D8

劇団アトモス

三田内ソラを座長とした劇団。規模はそこそこ大きめで劇団員もそれなりの人数がいるが、今回のプライベート公演には、アトモスの劇団員はほとんど関わっていない。

似来島に来ている劇団関係者は、三田内ソラ、俳優三人のみである。この俳優たちは最近オーディションされて劇団に入ったばかりの新人であり、劇団内では今回の公演は彼らの合宿のような扱いになっている。

『月下風葬』

劇団アトモスの代表作にして問題作。

『リング・グッドバイ』初演時の失踪事件と某地方都市で起きた連続怪死事件を題材にした群像劇。三田内が学生時代の初演時はそのあまりの生々しさとおぞましさ、三田内ソラこそ事件の真犯人なのではないかと噂されたほど。特に注釈がなければ、穏便な表現に修正された2010年版のことを指している。以後、何度か再演されたがそれらはすべて2010年版である。

関東のとある大学で起きた失踪事件と某地方都市の連続怪死事件は実は繋がっていた、というストーリーで、探偵役もいなければ事件も解決せず真相を知るのは観客だけという後味の悪い仕様。

『リング・グッドバイ』

三田内ソラが在学中に学内で行った公演。

公演直前の稽古中に主演男優が失踪するというショッキングな出来事があったものの、公演はほぼ成功。この作品が評価され、のちの劇団アトモスに繋がっていく。

奇妙なボタンを手に入れた人たちが次々と怪死していくホラー。唯一の生存者であり、ボタンを最初に手に入れた人物である「わたし」の手記を読み上げる形で舞台が進行する。

導入

探索者について

演劇に関連する探索者が望ましい。

探索者みずから旅行に行くことになるので、ある程度時間に融通のきく職業の方が向いているだろう。

●追加ルール: 行方不明者の探索

演劇と縁の遠い探索者に関しては、近親者が劇団アトモスのオーディションを受けに行って行方不明になり、その調査の一環として似来島を訪れることになる。この場合、招待状はどうかして手に入れたか、捏造したかのどちらか。

行方不明になったものは選考で落とされたが、そのとき三田内に声をかけられて別室に行き、黄金の蜂蜜酒もどきのハーブを飲まされて消息を絶っている。『アトラスの落日』に参加した俳優に話を聞けば、それらしい人物が三田内に声をかけられ別室に連れて行かれたという証言が得られるだろう。

似来島への招待

探索者たちは仕事や趣味などで知り合った人物から、孤島でのプライベート公演に招待されている。知識ロールに成功すれば、劇団アトモスは直近の公演が事故により中止になっていたことを思い出せる。また、演劇関係者はロールなしで知っていていいだろう。

公演は1月9日(土)の夜。ただし公演をする似来島には8日(金)10時発の船に乗らなければならない。公演の招待状には似来島2泊3日の旅もセットになっている。

準備期間

探索者には孤島に出発する前に準備をする時間が与えられる。シナリオ開始時点の日付を週明けなどにしてもいいだろう。この間に探索者の行動に合わせて黄の印を荷物に忍ばせることになる。

探索者たちの行動の途中で、全員に幸運ロールをさせる。このロールは手に入ってしまった黄の印に気づけるかというロールである。

成功した探索者は本人にわかる形でそれがもたらされるが、失敗した探索者にはいつの間にか荷物に紛れ込んでいるのである。

ex) 露店商から押し付けられる／知人から手土産として受け取る／行方不明者の遺物

またクリティカルを出した探索者がいた場合、その探索者のみ「この印を捨ててはならない」という脅迫的な思いにかられていると気づけるだろう。

●黄の印

黒瑪瑙の飾りボタンのようなもの。手のひらに握り込める程度の大きさで、瑪瑙には金色の奇妙な模様（黄の印）が彫り込まれている。模様を確認した場合はSAN消失 0/1D6。

下調べについて

準備期間に以下のことを調べると宣言した探索者たちはロールなしで以下の情報が手に入る。舞台のあらすじを調べる場合は、書齋にある資料を斜め読みしたのと同程度の情報が手に入る。

●劇団アトモス

三田内ソラが主催する劇団。演目は象徴的で怪奇的、メッセージ性の高い舞台が多い。

その内容に関しては賛否両論だが、熱心なファンも多い。

代表作は『リング・グッドバイ』、『月下風葬』など。

●三田内ソラ

劇団アトモスの座長で、舞台公演などを行う株式会社インテグラルの代表。アトモスの立ち上げ人でもある。

公演のほとんどは三田内が脚本を手がけ、大半の公演の演出も引き受けている。本人は舞台に立たず裏方に徹しているが、雑誌などの露出は多い。演劇業界の中でも変わり者と評判。

●似来島

東京湾にある孤島。

島にはオーナーの私邸である皇館と隣接する劇場があるだけで、それ以外は小さな林と丘がある程度。皇館はかつてホテルとして利用されていた洋館を移築したもの。現在は改修され、ホテルとしての設備はほぼ取り払われている。

似来島初日(1/8)

島に向かう船は8日(金)の10:00発。雨が降っており、港は暗い雰囲気にも包まれている。

指定された港に着くと似来島ご一行様というプラカードを持った男が立っている。

彼は雇われの案内人でプライベート公演については何も知らされていない。港に集まったのは探索者の他に演劇評論家の谷崎、出版社勤務の古藤、役者だという三島の三人がいる。

船には招待客しか乗らず、案内人も船には相乗しない。

船長または谷崎が古藤に話を聞くことができれば、似来島へは定期船がなく島のオーナーから依頼があったときだけ船を出していると教えてもらえる。

船長に対し交渉系技能のロールを行い成功すれば、役者と思われる劇団関係者3人を7日に運んだこと、オーナーには半年近く会っておらず心配していることも聞ける。

NPCの前で黄の印を取り出したり身につけていたりすると、興味を持たれるイベントが発生する。

三田内ソラの歓待

似来島に着いたら主催者の三田内ソラが出迎えてくれる。

探索者が特に行動を起こさないようなら、谷崎と三田内の舌戦が始まって空気が最悪になる。KPIは一人芝居頑張る。

屋敷に着いたら、各探索者が泊まる個室を選んでもらう。

屋敷の3Fは劇団関係者の部屋と稽古場があり、基本的に関係者以外立ち入り禁止。1Fの部屋は公演スタッフと屋敷のスタッフが寝泊まりしているので、選べる部屋は2Fに限られている。

誰も西側の部屋を誰も選ばなかった場合、導入時の〈幸運〉ロールで一番低い者が強制的に西の部屋に移る。(黄の印による誘導) 唐突に西側の部屋に移りたくなかった、など無理矢理で構わない。

その後昼食、屋敷と島内の案内などがあり、14:00から行動可能。

●立ち入り禁止エリア

屋敷3階：9日14:00まで

劇場：9日14:00～9日19:00まで

●NPCの行動

谷崎徹：屋敷の散策、劇場の見学

古藤桐子：三田内ソラの取材、稽古見学 (SAN消失1D6/1D10)

三島夕：劇場見学、島の探索

古藤桐子の動揺

夕食は食堂で取るなら19:00に準備される。部屋で取ることを宣言していれば、都合のいい時間に屋敷のスタッフが運んで来てくれる。

探索者たちが食堂で取るのなら、谷崎と三島と一緒に食事をとるだろう。古藤は食事が終わるころに、重い足取りで食堂に現れる。顔色は悪く、食欲がないとのことスプーだけで夕食を済ませる。稽古の正気度ロールで発狂していた場合などは、異常なほど動揺している様子などを見せてもいいだろう。

古藤に話を聞くなら、重い口ぶりで稽古を見たことを告げてくれる。内容を詳しく聞く場合は〈言いくるめ〉や〈説得〉が必要である。ただし成功したとしても、不思議な地名がよく出てきたこと、普通の芝居というよりは詩劇や朗読劇に近いこと、役者の様子が尋常でなかったことくらいしか聞き出せない。

食事が終わると三島が明日も雨のようだと、意味ありげに呟いて行く。

赤い星よりの使者

深夜、探索者が寝静まったころ、西側の部屋に泊まった探索者は目を覚ます。

窓の向こうには赤い星が輝いており、探索者は無意識のうちに窓に近づいている。その窓の下には、探索者を見上げる人物がいた。彼は黒い帽子に黒いコート。帽子のせいで顔は見えない。

〈目星〉に成功すると、その男の肌が異様に白くぶよぶよしているとわかる。SAN消失 0/1

目星に成功したかを問わず、探索者は男があなたに向かって何か言っていることに気づける。その言葉は窓に阻まれていてもかかわらず探索者のもとに届いたのだ。

「黄の印は見つかったか」

その言葉を確かに聞いたと思った瞬間、探索者は目を覚ます。

100Dのロールを行い、POW以下の数値が出たなら目が覚めたあとこの言葉を思い出せたとして、この言葉をプレイヤーに伝える。失敗した場合は何も思い出せない。以降はロールごとにPOW×2、×3と増えていく。このロールは夢のロールポイントで行うが、それ以外にも黄の印に近づいたとKPが判断した場合は、その都度行ってよい。

似来島自由探索

皇館本館 1 階

客室はすべて公演の裏方スタッフで埋まっている。玄関脇の部屋は事務所。スタッフルームは屋敷のスタッフの詰め所のようなもの、寝室と書斎はオーナーの私室のため関係者以外立ち入り禁止。ほとんどの部屋に豪華な装飾が施され、玄関ホールと中央のホールにはシャンデリアがある。浴室は午後15:00～22:00まで自由に使うことができる。

●マスターキーについて

スタッフルームのどこかに鍵置き場があり、そこに収められている。オーナー私室の鍵もそこにあるかは、KPの裁量にお任せします。

1F 書斎

鍵がかかっている。
外からは分厚いカーテンによって中を見ることは出来ない。だが窓の汚れや積もった埃から、人の出入りはほとんどないことが窺い知れる。
部屋の隅には地下への階段がある。扉は特に隠されていない。
部屋の中は埃っぽく、長い間人の出入りが無いらしいことがわかる。書斎に並んだ本は演劇に関するもの、ごく一般的なオカルトに関するもの、自己啓発本などがある。

●寝室

こちらも書斎と同じように埃っぽい。
ベッドに触れるともものすごい埃が舞うだろう。ベッド脇にはアンティークの小さな机がある。引き出しに鍵はかかっておらず、中からオーナーの日記が見つかる。

○オーナーの日記

ほとんどの日付が一行程度に対し、ところどころ何行も何頁も書かれている日がある。
30分ほどかけて確認すれば、そのほとんどが友人の三田内が尋ねてきた日であること、三田内の様子が徐々に変わっていき不安と恐怖を感じていたこと、また日記の日付が半年ほど前で止まっていることがわかる。

その他

●1F 東階段

地下に続く階段には、パーティションポールが設置されている。
下に降りようとするスタッフの一人が現れ、地下にはボイラー室などがあって危ないので行かないようにと言われる。このとき地下からうめき声が聞こえる話をするのもいいだろう。

●遊技場

大きなビリヤード台が部屋の中央に置かれており、いつでも遊ぶことができる。
壁にはいくつものキューが飾っており、部屋の隅には小さなバーカウンターと家庭用のワインセラーが置かれている。飲みたい場合はスタッフまで。

●サンルーム

大きな窓と開放的な内装が特徴のサンルーム。
窓辺には白いテーブルセットが置かれており、ティータイムにうってつけ。観葉植物が多いが、触るなり〈目星〉を行えばフェイクだとわかる。

●控え室

ホールでパーティなどを開く際、演奏者などの控え室に使われたらう部屋。
掃除はあまり丁寧でなく、ところどころに埃が積もっている。

●食堂

大きなテーブルがいくつも並び、かなりの大人数が同時に食事をとれるようになっている。観葉植物がいくつかあるが、これも人工。
食事の時間でなくても誰かしらスタッフがいるので、軽食なども作ってもらえる。

地下

地図を見せる場合は、真ん中の扉のところで切るなり折るなりして渡す。
廊下は鉄格子のはめられた頑丈な扉で閉ざされている。複雑な作りの鍵といくつもの南京錠で厳重にロックされており、〈鍵開け〉を試みるならマイナス補正が付く。
窓から向こうをのぞき込めれば、扉のすぐ左手に上へ続く梯子があるのが見える。通路の先は暗くて何も見えない。〈目星〉成功あるいは懐中電灯などを使えば突き当たりについてと右側の壁に二つ、扉があるのがわかるだろう。
〈ナビゲート〉あるいは〈幸運〉の半分でロールに成功した探索者は梯子の位置は、1Fにある倉庫の真下だとわかる。どちらにも失敗した探索者でも、歩数を数えるなどの具体的な行動に出た場合、相応の時間をかけた後に理解できる。

B1 倉庫

泥と血が付いた棺桶、箱に収められた内蔵や肉片、動物の死骸や正体不明の草などの、儀式に必要な道具が納められている。SAN 1/1D3
〈目星〉あるいは〈幸運〉の半分に成功で、《ゾンビの創造（ヴードゥー）》の呪文が書かれた詩編を見つけられる。
メモは「催眠状態／生きたまま埋葬／三日のち以下の呪文を唱える……」というような内容になっており、呪文に関しては血のような液体で汚れて範読できなくなっている。

洋室 12 帖

まっとうな物置。ただし様子はかなり荒れ果てており、あまり人が出入りしていない様子。
置かれているのは骨董品の類いや、不要になったと思われる大型の家具など。時間をかけて探せば、アトモスが過去に行った公演の小道具なども見つかるかもしれない。どれもすすけてとても使い物にはならないだろう。
部屋の隅に上の階へ上がる階段がある。〈ナビゲート〉に成功している探索者がいれば、書斎に出られるとわかるだろう。
荷物は部屋の端に寄せられていて、階段と扉の間は通路として残されている。

洋室 10 帖

外からカンヌキがかけられている。〈聞き耳〉成功で中からは人とは思えないうめき声が聞けるだろう。中に入れぼうごめく死体との戦闘になる。**夢のロールポイント**
部屋の中はまさに牢屋といった様子。コンクリート打ちっ放しの壁で、天井にほんの小さな通風口がある。
床には血液にも見える染みや、肉片らしき何かの塊、吐瀉物のような汚物などがまき散らされており、部屋には醜悪な空気が充満している。

うごめく死体は部屋に入った物に襲いかかってくるが、部屋を出てカンヌキをしまえば決して追っては来ない。倒したところで何の情報もないが、KPの裁量で三田内の犯行を示唆するような何かを残してもいい。

また追加ルールで行方不明者の捜索に来ていた探索者がいるなら、ゾンビの正体をその人物にしてもいいだろう。

その他

●洋室 8 帖

洋室ってなってますけど、これボイラー室です。
操作したければ〈電気修理〉などの技能が必要。

●納戸

屋敷で使う掃除道具や、脚立、その他それらしい道具が収められている。
探索者が探すなら懐中電灯などが見つかるかもしれない。

本館 2 階

屋敷の西側がすぐ海なので、西客室はすべてオーシャンビュー。
この階からは特に何も見つからない。NPC在室中に部屋を訪ねれば会話することもできる。

NPC の部屋

●南客室 1

谷崎が使用。よほど好感度を上げていないと部屋には入ることができない。
部屋にはパソコンや数冊の演劇雑誌が置かれ、在室中は基本的に仕事をしている。

●南客室 2

古藤が使用。テーブルに日比生のアルバムなどが飾ってある。
バルコニーにはティーテーブルが用意されており、希望すればここでお茶会もできる。

●東客室 2

静かなところがいいと、三島が使用。**夢のロールポイント**
たとえば真夜中に尋ねても快く部屋に迎え入れてくれる。ヒントが必要なときはこちらへどうぞ。

本館 3 階

劇団員たちが使う部屋があり、稽古中は三階そのものが立ち入り禁止になる。
1日目の夜などに探索者が3階を訪れる場合、階段を登ったところで〈幸運〉でロールを行い失敗すると三田内に遭遇。あまり立ち入らないでほしいと窘められる。再度チャレンジする場合はロールは不要。成功したときは俳優の一人と遭遇でき、三田内に妙な酒を飲まされたこと、芝居の異様ななどを話したあと三田内には近づかない方がいいと警告される。
稽古中や劇場でのリハーサル中など、三田内の居場所が確定しているときは〈幸運〉ロールは必要ない。誰にも会うことなく3Fを探索できる。

3F 書斎

書棚の多くは埃をかぶっており、しばらく人の出入りそのものがなかったと思われる。
〈図書館〉に成功すると劇団アトモスが行った過去の台本や資料が見つかる。これらを読むには斜め読みで3時間、すべての内容をきちんと把握するために8時間かかる。欲しい情報を絞るなら、そ

それぞれ斜め読みで30分、内容を把握するのに2時間で済む。**夢のロールポイント**

すべての内容を把握した探索者は〈アイデア〉ロールを行い、成功した場合、これらの戯曲と事件のおぞましさを、そして三田内の異常性に気がついてしまう。**SAN消失 1/1D3**

●『リング・グッドバイ』について

不思議な文様の入った飾りボタンを手に入れた男女数人が次々に奇怪な死を遂げていく話。

唯一助かったのはそのボタンを最初に手に入れた主人公だけで、物語は彼女の手記のような形で綴られていく。(斜め読みだとここまで)

主人公がボタンを手に入れたのは完全な偶然。そのボタンに興味を持った恋人に請われて彼女はボタンを譲る。その後恋人は惨殺死体で発見。殺害された彼の部屋からボタンを盗んだと思われる知人が次に死に……という流れで何人も犠牲になっていく。

作中で一番ひどい死に方をしたのは、ボタンを捨てたはずなのにいつの間にか手元に戻ってきていた青年。

●『月下風葬』について

某地方都市で起こった連続怪死事件を題材にしている。

ある日、姿を消した人物が失踪地点とかけ離れた地点で怪死しているのが発見された事件で、『リング・グッドバイ』公演直前に失踪した劇団俳優もこの怪死事件の被害者ということにされている。作中では淡々と事件が起こり、探偵役もいなければ事件が解決されることもない。真相に気づけるのは観客だけという後味の悪いストーリー。(斜め読みここまで)

実際の怪死事件の死体は真空による死か、凍死、高所からの転落死のいずれかであり、事件はいまだに未解決である。

警察や専門機関などが捜査したものの、この犯行を人間が行うのは不可能であるという結論が出てしまい、事件そのものが闇に葬られたと資料に残されている。

※連続怪死事件と俳優失踪事件はビャーキーによる犯行を想定していますが、事件の差し替え推奨です。たとえば過去にセッションしたシナリオの内容をなぞらえたりするなど、その卓にとってより劇的な展開を目指してください。

●劇団アトモス主演俳優失踪事件

『リング・グッドバイ』主演俳優が公演直前に失踪。

完全な密室での失踪で、いまだに未解決。(斜め読みだとここまで)

失踪前後、学内でUMAを見たと騒ぐ学生が何人か現れ、怪奇事件としてオカルト好きの間で話題になった。

稽古場

劇団員がいないときに〈目星〉成功で『アトラスの落日』の台本を見つけることができる。

この台本の表紙には黄の印が描かれている。(初回ならば**SAN 0/1D6**)

台本を読むには斜め読みで30分、内容を把握するためには2時間必要。

その内容は『黄衣の王』に似ている部分が見られるがほとんどが三田内の創作。古き地カルコサに追放された王と、その帰還を願うヒュアデスの乙女たち、それを妨害しようとする水をまとった醜い獣の闘争が描かれている。**夢のロールポイント**

内容を把握した探索者は〈アイデア〉ロールを行い、成功した場合**SAN 1/1D6**

その他

●客室 8

三田内の私室と化しているが、普段は鍵がかかっており入ることができない。

〈鍵開け〉に成功するかマスターキーを手に入れば、三田内がかなり長い期間ここに住んでいることがわかるだろう。

ここでも『アトラスの落日』の台本を見つけることが出来る。また本棚などに〈目星〉をすると星座の本の付箋がついたページや、手書きのメモから「1/9 21時、アルデバラン南中」という情報を得ることが出来る。**夢のロールポイント**

●控え室

稽古で使う小道具や衣装のような物が雑多に置かれている。

一部は埃をかぶっているので、今までに何度もこの皇館を稽古場として利用してきたことがわかる。

『アトラスの落日』に関わるものはここには置かれていない。

皇館外

劇場

舞台裏、その他裏手に行くと公演の裏方スタッフがいて話を聞くことができる。

※一階の舞台横の部屋には適当に扉があるものとして扱ってください。

裏方スタッフは皆、劇団アトモスとは無関係で今回の公演のために特別に雇われた者たちである。アトモスや三田内に関しては一般的な評判や噂程度しか知らない。ただ今回の公演については、そもそのシチュエーション、講演の内容、台本の異様さなどから非常に気味悪がっており、中には今すぐ仕事を投げ出して帰りたいと言う者もいるだろう。**夢のロールポイント**

彼らが持つ、あるいは置かれている台本には黄の印は書かれていない。大本の中身は裏方スタッフへの指示ばかりで、役者のセリフなどはほとんど書かれていない。読ませてもらえば、ここで役者が上手に動くのでスポットを当てる、そのあと役者が泣き崩れたらこの音楽を流す……という曖昧な指示ばかりが書かれている。

客席内に入れば、ほぼ完成している舞台のセットを見ることができる。**夢のロールポイント**

似来島および皇館外周

島の南端に港、そこから西側にしばらくビーチが続き、西端の崖の上に皇館がある。劇場は皇館の東側にほぼ隣接している。港の東側は林、海辺はほぼ岩場で泳ぐには適さない。泳ぎたい探索者は西側海岸へどうぞ。真冬でしかも雨ですけど。

皇館の西側はすぐ崖になっているため、近づこうとするとスタッフやNPCにとめられる。

それでもなお行くなら、皇館と崖の間の一メートルほどのわずかな敷地を通ることが出来る。柵などはないので、充分気をつけて探索させるように。赤い星よりの使者を見た探索者は、かの人物はここに立っていたかと思出すことが出来る。**夢のロールポイント**

似来島二日目(1月9日)

雨は以前と降り続けている。天気予報を確認した探索者がいるなら、1月8日から雨が降り続けた雨は夕方頃にやみそうだとわかる。

朝食は8:00に食堂。三田内を含めたスタッフは各自で食事をとっているため、食堂にはいない。ここで朝食を取るのには探索者と、谷崎、古藤、三島だけである。

古藤は朝食の時間にかなり遅れてくる。前日より顔色はよくなっているが食欲は戻っていない。

聞き込みスケジュール

食事を終えたあとは各自好きに行動してよい。特に指定がなければ昼食は12:00。また15:00にサ
ンルームへ行けばお茶会に参加できる。

NPC の行動

谷崎徹：劇場見学、遊技場

古藤桐子：部屋で休養 お茶会参加

三島夕：屋敷の探索、お茶会参加、遊技場

●行動を共にした NPC から得られる情報

- ・三田内の経歴、アトモスの経歴
- ・『リング・グッドバイ』、『月下風葬』のあらすじ
- ・裏方スタッフは劇団外の間人をわざわざ雇っている
- ・『リング・グッドバイ』俳優失踪事件
- ・某地方都市で起こった連続怪死事件

●屋敷のスタッフから得られる情報

- ・普段はスタッフはおらずオーナーだけが暮らしている
- ・スタッフは何かあると雇われるのでオーナーと直接面識のある者はいない
- ・オーナーは地下に籠もりきり
- ・地下から時折、奇妙な声が聞こえる気がする

●裏方スタッフから得られる情報

- ・劇場のスタッフは劇団とは無関係、個人的な公演なので劇団外から呼んだ
- ・舞台に関してはほしいのスタッフは気味悪がっている **夢のロールポイント**

最後の晚餐

夕方頃、長く降っていたあるがやみ、空が晴れ始める。

18:00に食堂で夕食。このときだけは部屋で取りたいといっても認められない。

夕食には三田内も同席し、時間になったらそのまま劇場へ向かうことになる。三田内は舞台の出来がほぼ完璧なものであること、今日この公演を見られる探索者たちは実に幸運であることなどを興奮した様子で語る。

これは曇っていた天候が公演前に回復したことを示唆しており、彼は何度も窓の向こうの空に目を向ける。

食事の途中、三田内が飲み物をつぎに探索者のテーブルへやってくる。三田内はにこやかな笑顔で「黄の印という物を持ってはいませんか？」と尋ねる。〈心理学〉に成功すれば、彼が探索者たち全員がそれを持っていると確信しているのがわかる。

このとき探索者たちが黄の印を知らないそぶりを見せると、『アトラスの落日』の台本の表紙を見せてくれる。(初回ならば **SAN消失 0/1D6**)

使用者の夢を見た探索者がまだ思い出せていなかった場合、ここで確実に思い出すことができる。

探索者たちが黄の印を知っていることがわかると、三田内は執拗に譲ってくれるように頼んでくる。

このとき渡していればシナリオクリアとなる。

三田内が黄の印の話をしてくる前に彼に印を譲ろうとした場合、彼は喜んでそれを受け取り、ずっと探していたのだと感謝するだろう。

アトラスの落日

19:00、三田内の案内で劇場に入ると、すぐに開幕ベルが鳴る。

舞台の幕はすでに上がっており、そこには巨大な黒い柱がV字を描くように並べられ、その向こうには荒涼たる奇妙な地平が広がっている。

公演を見たくなければ交渉系技能で三田内を説得するか（ただしよほどうまい理由でなければ、かなりのマイナス補正が入る）、暗くなった劇場から〈忍び足〉などで逃げる必要がある。逃げる方を選ぶなら、暗闇のためプラス補正をつけてもよい。

舞台の内容はまるで悪夢を具現化したような気味の悪さとともに進んでいく。古き土地カルコサに追放された王を嘆き命を捧げる娘、彼らの祈りを妨害しようとする水をまとった醜い獣。陰湿で嘆美、暗く淀んだ喜びがじわじわと探索者たちの心を蝕んでいく。

黄衣の王を基にした三田内の狂気の世界に触れた探索者たちは、まずその狂気と対抗しなければならない。POW 11との対抗ロールをし、失敗した探索者はここで行われている芝居が邪神を生もうとしていることに気がついてしまう。**SAN消失 1D6/1D20**

王の帰還

舞台がクライマックスを迎える21:00、アルデバランの南中の時刻、舞台上の空に赤い星が光る。それと同時に黄衣の王に扮した役者が舞台上に降り立つ。黄色の衣をまとった人間であるはずのその姿は、観客の目に異形の物として映った。

衣の下から垣間見える四肢は徐々に人の形を失い、ぶくぶくとした蠢く軟体動物の触腕に似た何かへ変貌する。フードの下に見えるはずの顔は、ぽっかりと穴が空いたように淀んだ闇に覆われていた。

黄衣の王の化身、その似姿への変異を目撃した探索者たちは**SAN 1D3/1D8**のロールを行う。

POWの対抗ロールに失敗した探索者たちは、この舞台があつた王を生み出すための装置だったときがつけるだろう。

特に誰も行動しなければ、王の出現に興奮した三田内が舞台に飛び出す。このとき黄の印を誰も三田内に渡していなかった場合、一番近い探索者の手から印を奪っていく。印は王の誕生を察知して探索者の手元に移動しているのである。

その間にも舞台は腐食し、そこに立っていた役者たちは恐慌に陥るか気絶する。誰も三田内を止めないのなら、あるいは止めたとしても、三田内は舞台中央に立つ王の下へ駆け寄り黄の印を差し出す。

王の触腕が黄の印に触れると、そこから三田内の肉体も腐食し始める。腕がぶよぶよと蠢き、肩へ胸へ、やがて頭すら触腕の一部として飲み込まれていく。**SAN消失 1D4/1D10**

このとき〈目星〉に成功した探索者は、飲み込まれる直前、三田内が微笑んでいたことに気づけるだろう。

三田内の身体がすべて飲み込まれると、劇場全体の電源が落ちる。わずかな混乱のあと非常灯が灯り、次第に復旧していく。舞台が明かりに照らされたとき、そこには王の姿も三田内の姿もないだろう。

だが、気絶した俳優たちと腐食した舞台が、すべてが現実だったことをあなたたちに突きつけてくる。こうして劇団アトモスのプライベート公演『アトラスの落日』は幕を下ろした。

エピローグ

帰りの船が来るのは10日の昼頃なので、特にやりたいことがなければ一気に島から帰還したあとまで時間を進めて構わない。探索者たちは皆、それぞれの日常に戻るだろう。

確認したければ本館内を好きなだけ探索することもできる。

役者たちは意識が朦朧としており、本番はおろか稽古中のことも思い出せない。彼らに話を聞けば、島に来た直後に三田内から不思議な酒を飲まされたことを教えてくれる。ただし王に扮した役者だけはどこを探しても永遠に見つからない。彼は三田内の妄執によって黄衣の王の化身として作り替えられてしまったのだ。

地下の死体はただの死体に成り果てている。警察に通報すれば死因はおそらく薬物中毒であること、死後半年ほど経過していることが後日報じられるだろう。

使者の再訪

黄の印を三田内に譲っていない探索者がいた場合、島から戻った数日後から家の周囲に黒衣の男が現れるようになる。その男の皮膚は白くぶよぶよしておりとても生きた人間には見えない。そして男はこう言うのだ。

「黄の印は見つかったか」

もしも、黄の印を自ら人に譲ったり捨てたりした探索者がいた場合、いつの間にか舞い戻ってきた黄の印は自らを捨てたものへ復讐をするだろう。あなたの想像も絶する恐怖と死がやがて探索者に訪れる。これはもはや回避することの出来ない確定的な未来である。

あとはそれがいつ訪れるか、それだけの違いだ。